

【はがくれ】

村のはずれに、気味のわるいおやじがいました。

このおやじは、ぼくと同じ「おぼけ愛好家」で、なんとかしておぼけになりたいと、懐爺に相談しました。

懐爺は苦笑しながら、

「どんなおぼけになりたいのですか」

ときくと、

「姿が見えなくなる、おぼけになりたいんじゃ」

それで懐爺はこういいます。

「蟪蛄（かまきり）は蟬を捕まえるとき、葉っぱの後ろに姿を隠し、それで蟬を捕まえます」

「よっしゃ。それで、俺はなんという名前のおぼけになるんじゃ」

「葉っぱで姿を見えなくしますから、【はがくれ】でいかがでしょう」

「よっしゃ。それがええ」

【はがくれ】は、とにかく葉っぱをいっぱい集めて、妹で試してみようと思立ち、

「どうだ妹よ、見えるか、見えないか」

沢山の葉っぱを身体に貼り付けていきました。

「見えるよ。兄さんじゃろ」

葉っぱが足りないのか。

また沢山の葉っぱを貼り付けて、

「見えるか、見えんじゃろ」

「見えるよ」

さらに沢山の葉っぱを貼り付けて、

「こんどこそ見えんじゃろ」

面倒臭くなった妹は、

「見えない、見えない。兄さんはどこじゃ」

と嘘をつきました。

「よっしゃ」

と【はがくれ】は、そのままの恰好で町まで行き、商店街のめぼしい品々を盗んで廻ったのです。

とうぜん店店の主人とお巡りさんから、

「泥棒、泥棒」

と追い掛けられ、あえなくご用となってしまいました。

意気消沈した【はがくれ】は、

「おかしいのう、見えんはずじゃが」

とぼやくと、お巡りさんは、

「たしかに見えん、泥棒には見えん」